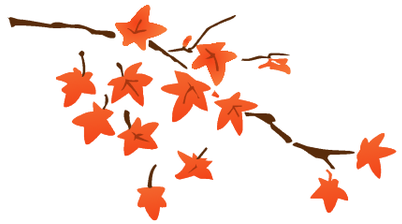
図書館だより



２０１７年(平成２９年)
１０月２０日　・　金曜日
第　５　号(読書感想文号)
北海道旭川永嶺高等学校
図　書　局

「幸せ」とは

山形優真

幸せというものはまだよくわからなかった私はこれまでたくさんの本を読んできたが、幸せについてこんなに考えさせられるものは、今までなかったと言ってもいいだろう。私は今までとても飽き性で、一つのことに長い期間をかけて取り組みたいと思うものはなかった。だが、最近やっとそうしたものが見つかった。それは看護師という職業を目指すことだ。それを見つけた瞬間、今までとは違う感じがした。私はそんな時にこの本に出会ったのだ。私は主人公の活発で好奇心旺盛で自分の思ったこととははっきりと言う生き方にとても興味を持った。なぜなら、私が主人公の考え方や生き方とまったく反対だったからだ。

「人生とは〇〇というもの」が口癖の主人公は小学生の小柳奈ノ花。同級生のことを自分より下に見ている。間違ったことは間違っているとはっきり言うことからクラスの男子とはよくケンカをする。ある日、季節を売る仕事をしている「アバズレさん」、いつも奈ノ花の相談に真剣にのってくれて、お菓子を持って待ってくれている「おばあちゃん」。そしていつも小説を書いていて、本当は優しい女子高生の「南さん」と出会う。主人公とこの三人には「口癖」が同じという不思議な共通点があった。あるとき、「幸せ」について自分はどう思うのかを授業参観で発表することになった。奈ノ花は三人の幸せを教えてもらいながら、本当の自分にとっての幸せを探し始めた。長い人生の途中で失敗したとしても、失敗をチャンスに変えて堂々と自身を持って生きればいいとエールを送ってくれるお話だ。

私はこの本は多くの人に一回は読んでほしい本だと思った。なぜなら、内容が深く考えさせられる点がたくさんあるからだ。もし、この本を読んでいなかったら、「幸せとはなにか」「人生とはなにか」などを改めて考えたりすることはなかっただろう。中でも主人公が「南さん」との会話の中で両親とのケンカについて話しているシーンがとても味わい深かった。私は両親とケンカはあまりしないが、小さなことから始まってしまうこともある。それに気づいてしまった私は気を使ってしまい思っていることを言うのがめんどうくさくなってしまった。「お父さんもお母さんも仕事がめんどうくさくなってしまった。」それと同じように奈ノ花も両親に対して「だったらお父さんもお母さんも仕事が忙しくない家に生まれたかった」と言ってしまった。私はこのようなことは言ったことはないが、少しだけ共感できる部分もあったように思う。もし自分がそのような主人公の立ち場だったら、どうしていただろう。すぐにあやまったのだろうか。もしくは、この現実から逃げまわるのだろうか。たくさん出てくる中で私は自然な仲直りを待つだろうと思う。なぜなら、いつもの私がそうだからだ。私は主人公と同じようにあやまることはすぐにはできない。私はこの本を読んで自分のそんな所を考えさせられた。

今思えば、そんな自分ははっきり言うことができない。だから、人は間違ったり失敗することによって、たくさんのことを自分の周りの人から得て、なにが正しいのかを学んでいきながら成長していくのだとこの本を通して知ることができた。

また、主人公の奈ノ花が「幸せとは」について堂々と言う場面も心に残った。奈ノ花は最初、クッキーに好きなアイスをのせられるというのが幸せだと言っていた。だが、最後には「幸せとは自分がうれしく感じたり楽しく感じたり、大切な人を大事にしたり、自分のことを大事にしたり、そういった行動や言葉を、自分の意思で選べることです。」と胸を張って言っていた。私は小学生のうちに幸せとは定義を導きだしていることに驚いた。私は今「幸せとは」と言われてもすぐには出てこないと思う。なぜ人は「幸せとは」と考えるのだろうか。私は短い人生を有意義に、そして最後に生きてよかったと心から言えるように過ごすための自分にとっての定義なのではないかなとこの本を読んで思った。

最後にこの本は看護師になりたいと思った私に希望を与えてくれた。この本の内容はとても深く、ストーリーを理解するのに少し時間がかかった。最近はあまり本を読む機会のない私だからこそ率直な感想を書けたと思う。私は主人公の幸せの考え方にすごくひかれた。主人公と同じように「幸せ」ついて友達と話し合ったり、真剣に一人で考えてみたいと思った。この本を読んで思った、私の「今」の幸せは朝ごはんを作ってくれたり、洗濯してくれる母がいて、家族のために毎日働いてくれている父がいるこのあたりまえの環境があることと、たわいのない話ができる友人がいることだと思った。私にとっての「幸せ」の定義が大人になっても変わらないでいてほしいと心から思っている。